

glide, *v.i.* float, flow, skim; slip, slide, coast. See MOTION, AVIATION.
glimmer, *n.* & *v.* —*n.* glance; appear, peep, glance, see, peek. See VISION.
glimpse, *v.* & *n.* GLANCE; see VISION.
glint, *n.* & *v.* —*n.* luster, brightness, —*v.* flash, gleam, glisten, scintillate; VISION.
glisten, *v.* glisten, shine, gleam, glint,
glitter, *v.i.* & *n.* shine, flash, gleam, twinkle. See LIGHT. *Ant.*, see DARKNESS.
gloat, *v.i.* boast, exult, rejoice; stare, BOASTING, PLEASURE. *Ant.*, see PAIN.
globe, *n.* ball, sphere; earth; orb. See GLOBULE.
globule, *n.* drop, bead, droplet, blob; SPLEEN.
gloom, *n.* DEJECTION, sadness, dolefulness, dimness, obscurity; pessimism. See DARKNESS.
glorify, *v.* exalt, magnify, revere; exaggerate, flatter. See ELEVATION, REPUTE. *Ant.*, see DIGNITY.
glory, *n.* aureole, halo, nimbus; radiance, brilliance; honor, kudos, renown. See BEAUTY, UGLINESS, DARKNESS, DISREPUTE.
gloss, *n.* luster, sheen, shine, finish, polish; glossiness. See LIGHT, SMOOTHNESS. *Ant.*, see DULLNESS.
glove, *n.* mitten, gauntlet. See CLOTHING.
glow, *n.* & *v.* —*n.* flush, sheen, light, radiance, gleam, flush, burn, blaze, flame. See HEAT, LIGHT.
glower, *n.* scowl, frown, glare. See RESENTMENT.
glue, *n.* & *v.* —*n.* mucilage, paste, cement, adhesive; adhere, cement.
glum, *adj.* morose, dismal, sullen, moody, gloomy. See DEJECTION. *Ant.*, see CHEERFULNESS.
glut, *v.* & *n.* —*v.* stuff, cram, choke, pack, jar, plethora, saturation, SATIETY, REDUNDANCE.

glance (glāns) *n.* a brief, cursory look. —*v.i.* 1, flash; gleam. 2, take a hasty look. 3, strike and be deflected.

gland *n.* an organ that secretes a substance to be used in the body. —*glandu-lar* (glan'dyū-lər) *adj.*

glan'ders (glan'dərz) *n.* a contagious disease of horses.

glare (glār) *n.* 1, a dazzling light. 2, a fierce look. 3, a slippery surface, as of ice. —*v.i.* 1, shine dazzlingly. 2, stare fiercely.

glar'ing *adj.* 1, shining dazzlingly. 2, obvious; notorious.

glass (glās) *n.* 1, a hard, brittle substance, usually transparent, made of silicates fused at high heat. 2, an article, as a mirror, tumbler, etc., made of this substance; a telescope, or binocular: *spyglass*. 3, a tumbler; the amount of liquid in a tumbler. 4, (*pl.*) spectacles. —*glass-ful*, *n.*

glass-ine' (glā-sēn') *n.* a thin transparent paper.

fat, fāte, fār, fāre, fāl, āsk; met, hē, hēr, maybē; pin, pine; not, nōte, ōr, tool

works with glass.

gleam (glēm) *n.* 1, a brief flash of light. 2, luster. —*v.i.* emit dim rays of light.

glean (glēn) *v.i.* & *t.* gather (grain) after the reapers; pick up leavings.

glee (glē) *n.* 1, mirth; delight. 2, a musical piece for three or more voices. —*glee'ful*, *adj.* exultantly happy.

glen *n.* a narrow valley; dale.

glib *adj.* [glīb'ber, -best] fluent but insincere. —*glib'ness*, *n.*

glide (glīd) *v.i.* move smoothly and easily. —*n.* 1, a smooth, easy motion. 2, the downward flight, without engine power, of an airplane.

glid'er (glī'dər) *n.* a motorless aircraft resembling an airplane.

glim'ner (glīm'nər) *n.* a faint and wavering light. —*v.i.* shine faintly.

glim'ner-ing *n.* a faint trace, of light or anything.

glimpse (glīmps) *n.* 1, a momentary view. 2, an inkling. —*v.t.* get a hasty view of.

glint *n.* a streaked reflection of light; a flash. —*v.i.* flash; sparkle.

glis-sade' (glī-sād') *n.* 1, a sliding down a snow slope in a standing position. 2, a glide in dancing.

glis-san'do (glī-sān'dō) *n.* (*Music*) the effect of sliding the finger across the keys or strings of an instrument.

glis'ten (glīs'tən) *v.i.* shine with sparkling light; gleam.

glit'ter (glīt'tər) *v.i.* 1, send off shoots of light, as a gem; sparkle. 2, be brilliant or showy. —*n.* 1, sparkling light. 2, splendor; allure.

glow'ing (glō'mīng) *n.* twilight.

gloat (glōt) *v.i.* 1, gaze or ponder with spite, lust, or greed. 2, show joy at another's misfortune.

glob'al (glō'bəl) *adj.* worldwide.

globe (glōb) *n.* 1, a sphere; a ball-shaped body. 2, the earth. 3, a sphere bearing a map of the earth. 4, something of near-spherical shape, as an incandescent lamp, a bowl, etc.

globe'trot'ter *n.* one who travels all over the world.

アメリカで1970年代に刊行された英語の辞典(英英辞典)に globalization の単語はない

1. グローバリゼーションとは 何だった のか？

英語には もともと “globalize” とか “globalization” なる用語は 存在しなかった。英語の最も権威のある辞典類にも、これらの単語は収録されていなかった。それが使用されるようになったのは 比較的 新しいことで、年代的には 1990 年ごろからである。このような新語が登場したのには、その当時の世界史上に 相応の歴史的变化があったからである。

その歴史的变化とは、**米ソ冷戦の終結**（米ソ和解 + ベルリンの壁崩壊 1989 年、ドイツ統一 1990 年、ソ連崩壊 1991 年）および **インターネット解禁**（1991 年）であった。このころを境として、従来の表現法、たとえば「国際化」（internationalization）という言い方では表現しきれない新しい現象が現れたためである。

国際化とは、“nation state”（民族国家 / 国民国家）の枠を超えて ヒト、モノ、コトが移動し、拡散し、交流することと解釈されていた。その意味では、資本も国際化していた。しかも、資本の国際化（資本の対外投資、海外での資本移動や資本の増殖）は 19 世紀からおこなわれていた。

資本の国際化現象一般については、日常用語として語るうえでも、学術用語として使用するうえでも、在来用語（「国際化」）で十分であった。

ちなみに、日本で 1980 年代までに新設・増設された大学、学部で、この分野にかんするものは、ことごとく「国際・・・」であった。たとえば「××国際大学」、
「国際××学部」というように。また科目名も、「国際××論」というものであって、「グローバル××論」という科目は存在しなかった。

しかし、冷戦終結 と インターネット解禁 は、従来の「国際化」では言いあらわせない新しい現象を 世界史にもたらした。それは、冷戦の勝者 アメリカ の様式に、アメリカの技術に全面依存して、あらゆるモノ、コトを適合させて、資本蓄積も、生活様式も、文化のありかた までも 新展開させていこうという傾向であった。それは、一言にして、世界の「アメリカ化」のことである。それは、国際化の一形態では あるが、従前の それとは明らかに 局面（phase）を画する、新 局面 のそれである。

国際化一般ではなく、「アメリカ化」としての国際化を 正確に 表現するためには、新語が必要となった。その必要に こたえるべく登場した新語が、ほかならぬ「グローバル化」であった。ちなみに “globalization” なる用語が 最初に使用された時期を厳密に言えば、それは 冷戦終結が 時間の問題となった 1980 年代末のことであった。

2. 「グローバル化」に熱心なのは 欧米ではなく アジア である

世界の「アメリカ化」としての「グローバル化」の スローガンに、当のアメリカではあまり熱心ではないようにみえる。政財界の要人、研究者の論説、メディアの報道、そして街並みの看板や聞こえてくる会話に“globalize”とか“globalization”なる用語はほとんど存在しない。

アメリカでは、冷戦の勝者として、資本の流入と流出、商品の輸入と輸出、人々の往来、文化の拡大・伝播、研究者・技術者・留学者の集中などは、冷戦終結以前からあったことが、あまり質的な変化をすることなく、量的に増えただけに見えているからである。この国には、あえて“international・・・”とは異なる用語“global・・・”を使用しなければならない積極的な理由があまり存在しないからである。

一方、ヨーロッパは“globalization”には一般に冷淡である。アメリカを文明的には一段遅れた世界と見なす傾向がヨーロッパには伝統的に存在し、いまでもそれは消失していないからである。とくにフランスでは、「アメリカ(=女性名詞)はフランスの出来の悪い娘」といったドゴールの言にも象徴されるように、アメリカの方式に従うことは忌避する傾向がつよい。フランスでは“globalization”なる語はまず使用することはなく、必要などきは、“mondialisation”という語を使用する。

結局のところ、“globalization”なる用語の使用に熱心なのは、キャッチアップに余念のないアジア諸国ということになる。資本主義の発展に遅れたこれらの諸国が冷戦の勝者にへつらって生きようとするなかで多く使用され、拡散していった用語なのである。

冷戦終結後の世界で成功裏に経済成長を達成するためには、「アメリカ化」がいちばん手っとり早い道だという判断である。ただし、直裁に「アメリカ化」といってしまうのは「国民的スローガン」としては支持を得られないから、「グローバル化」といっているにすぎない。「グローバル化」とは、弱者(としての新興諸国)が経済成長その他もろもろの成長を急速に達成するために、強者たる冷戦の勝者にへつらう国民的スローガンである、ということができる。

いわゆる“globalization”は、たんなる「アメリカ化」一般でもなく、いっそう正確には、アメリカ外で叫ばれている「アメリカ化」のスローガン、または「アメリカ化」傾向を表現するための用語である。それは、たんなる「国際化」でもなければ、たんなる「世界化」でもないし、中国でいう「全球化 quanqiuhua」の無垢な姿でもない。

3. 資本の国際的展開は 近代の政治理念に 反する ことであつた

ヨーロッパ近代の政治理念は、カトリック教会からの自立を目指す**宗教改革**をとおして形成され、**ヴェストファーレン体制**（ヴェストファーレン条約 1648 年）に集約され、**啓蒙思想**として体系化された思想となり、アメリカ独立革命、フランス革命、その他一連の**市民革命**をとおして実践が試行された。

その理念とは、個々人（individuals）は自由であり、平等であり、絆で結ばれていなければならない（Liberté, Égalité, Fraternité）のであり、それとともに、諸国民（nations）についても、相互に**独立**していて、**対等**な立場であり、国際的**協調**体制で結ばれていなければならない、とするものであつた（カント『永遠平和のために』で 定式化）。

この精神からすれば、**ヨーロッパ連合(EU)**は **反動的だ** ということになる。すなわち、ヨーロッパ各国民を ふたたび全ヨーロッパ的権威のもとに 従わせようとする（中世ではカトリック教会の、現代では 巨大金融資本の）。そういうヨーロッパ人の思いが 移民や難民の流入に 契機があたえられて、EU解体論の思想的原点となっている。ヨーロッパ統合を支えていた諸条件（東の大国ソ連の脅威、西の大国アメリカ資本攻勢、南の旧植民地の喪失への対抗・補完）の意義が 消滅ないし減衰した現在、ヴェストファーレン体制の原点に立ちかえることは 反動とはいえない（たんに移民・難民問題への反感という偏狭な感情ではない）、というのがヨーロッパ市民の心情である。

イギリスのEU離脱、フランスのFront National : FN, ドイツのAfD, イタリアのMoVimento 5 Stelle などの勢力拡大は、一般市民がいなく そういう心情の政治的表現となっている。

だが、ヴェストファーレン体制、より大きくは、ヨーロッパ近代の政治理念が崩壊していった理由を、ヨーロッパ統合を画策してきたことだけに帰着させてはならない。根本的な問題は、資本蓄積にあつた。すなわち、資本は 際限なく蓄積を追求するものであるから、個々人についても、諸国民についても、Liberté, Égalité, Fraternité の原則を 早晩 破壊していくことになる、ということである（ヨーロッパ近代の政治理念を 100% 受け入れたとき、資本蓄積のもつ問題性は 100% 受容しがたい —— という考え方が マルクスをして『資本論』執筆に掻きたてた と 言ってよい）。

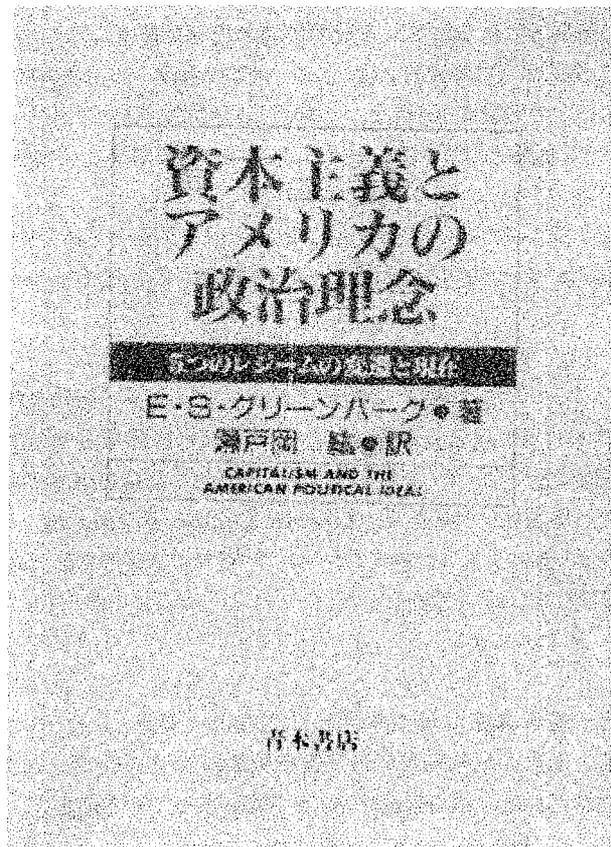
こうしてみると、資本蓄積は 国境を越えて 国際的に展開し、そのことによって 近代の政治理念を破壊し、それが近代的市民の我慢を限界にまでもっていく、ということが読みとれる。このことは、この、21 世紀ヨーロッパでおこっていることが、さらに拡大された規模で、アメリカにも おこっていることを 示唆している。

4. 建国の理念に反する 自由貿易 と 技術革新 と 高額 の 税 ——

アメリカ白人中間層市民の反発 —— 「建国の理念 どおりの アメリカに 戻してくれ！」

「自由貿易も 技術革新も もう うんざり だ ！」に共感する人たち (いくら真面目に働いても所得は増えない / 子は親より豊かになれない / 商業と金融の国境を超えた活動と技術革新とで職場は追われ、仕事はなくなり、借金だけが残った・・・—— 目立たないが圧倒的多数のこういう人びとが 静かに トランプに投票した。

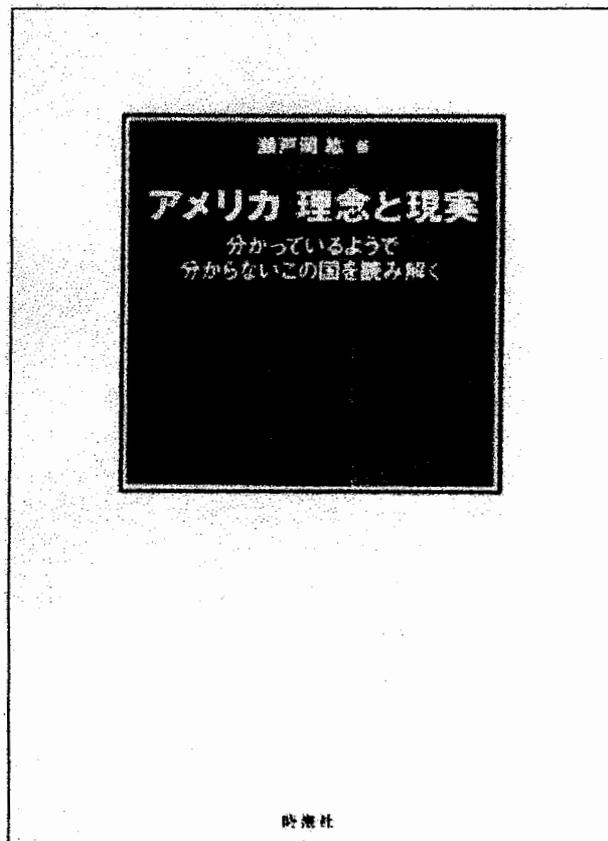
退役軍人 (2000 万人もいる！) たちも 外国の防衛に動員されることに批判的。なぜか？ —— たとえば「テロとの戦い」といって「9.11」以降 20 万人が動員され、7000 人が死亡、しかも投じた戦費は 日本円にして 177 兆円 (日本の国家予算の約 2 年分)、**それでも、テロは 逆に増え、勢いは増すばかり** —— アメリカのためには、結局、なっていなかったではないか！ あれほど「暴言」が問題になったにもかかわらず、女性の 53% が「**もう世界の警察官は やめて!**」とトランプに投票 した。



もうひとつ、法人税を下げること（現行 35% → 15%）に大筋で **白人貧困層からさえ歓迎**される。理由は、高率の税は「自由で自立した 個人々人をつくる社会」の精神に反しているという考え方 = アメリカ建国の理念に反するとの感覚。

白人中間層 市民男女の こうした思いが、1917 年に放棄した「モンロウ主義」の**放棄**を決定づけた（第一次世界大戦に参戦、勝敗を決定、以後 100 年間、アメリカが世界の政治・経済・文化を主導してきたことを、ピッタリ 100 年後の 2017 年に**放棄**にむけて動き出す — NAFTAも、TPPも、世界の警察官も — ）

アメリカ建国の理念、および その理念が 資本主義の発展とともに 形骸化していく過程については、瀬戸岡『アメリカ 理念と現実』（時潮社、2005 年）参照。



アメリカ建国の理念とは、「自由な諸個人がゆるやかに結合する共同体(リパブリック)を建設」することであった。「独立宣言書」も「アメリカ合衆国憲法」もその理念のもとに書かれた。それは、ヨーロッパ近代の政治理念のアメリカへの移植でもあった。理念に最も近い姿は、建国当初の農村にあった(たとえば、ローラ・インガルス一家の物語『大草原の小さな家』の世界)。

その地点からすれば、いまや「リパブリック」の理想からはあまりにもかけ離れた社会になってしまった。建国の理念の体現者を自負してきた白人中流市民層たち(いまは少なからぬ者が下層同然の状態に転落)は、心中で(ただし公言はひかえる)「一段格の低い人種」と見下してきた非白人たちと、気がつけば同列に落ち込んでいる自分の現実を見ると、無性に怒りが生じる。そこからでてくる切実にして素朴な要求が「**建国の理念 どおりのアメリカに戻してくれ!**」であった。

そもそも、「建国の理念」には、**成長も格差拡大も想定されていなかった**のだから。

5. 自然 / 環境 / 社会 / 人間の許容量をこえて成長した分はリセットされる

人間の活動(生活から生産そして資本蓄積まで)を許容してくれる受け皿(自然——広い意味での「自然」: 安定した人間の身体的・精神的状態もふくむ)が許容しうる範囲を超える活動は必然的にリセットの時期をむかえる。資本主義経済のもとでの経済発展には10年程度の周期で**経済恐慌**が、帝国主義世界体制のもとでの急激かつ不均等な経済発展のなかでは**世界大戦**が起こってきたのは、そのためだった。資本主義経済は理性の通じる世界のように見えながら、その実、人類の体験してきた社会システムとしては、最も混乱・動乱・戦乱が多いシステムだった理由は、その蓄積の規模と速度の巨大さに基づく。

いま資本蓄積が**全地球規模**に拡大し、**かつてない速度**で展開し、その影響が空前の領域(経済・政治だけでなく、生活・教育・科学・文化・芸術など考えられる**あらゆる分野**)におよんでいる以上、経済恐慌や世界大戦をはるかにしのぐリセットの時期がくると考えることは、理にかなったことではないなどといいきることはできるだろうか。

重要な点は、資本主義の経済体制、そのもとでの政治体制、人々の生活から文化にいたるまで、すべてを破壊してしまいかねないような動向の主体が資本主義のシステムに依拠して活動している者たち(資産の保有者・運用者、企業の管理者・経営者)だけにとどまらず、ごく普通の一般市民たち、すなわち資本主義社会のなかに生きる生活者たちみずからが破壊の主体者として登場しようとしている点である。

そこでは、資本主義世界システムの破壊は、神など超人的な力がおこなうものではなく、この社会に生きる ごくごく普通の人びとの願いとなっているかのようである。経済活動・金融活動の 国境を越え 地球規模での展開への 反発が、ほかならぬ アメリカ建国理念の 体現者としての 白人市民たちから起こり、ヨーロッパ統合を 解体に いたらしめようとする運動が 数百年の歴史のなかで形成されてきた ヨーロッパ近代市民たち自身から巻き起こっていることが それを物語っている。

現代では、資本主義経済の運用と発展は、資本主義のもとで働く一般市民（中流市民）が担ってきた。その担い手が こともあろうに破壊者に転じる、というのが現代史の真実なのであるが、じつは、同じことが政治面でもおこっている。すなわち、民主主義の原則を、その担い手であり、恩恵の受益者であった 一般市民自身が 放棄することも おこりうる、ということである。そればかりでない。そういう人たちの あいだから「戦争待望論」さえ出現するのである。戦争こそ、最強にして 究極のリセット行為なのだから。

それは、資本が 資本の蓄積システムを みずから 破壊へと導いている現実と 対応している。すなわち、資本蓄積が生産を遠く離れ、金融に没頭するに いたった事実を考えよ。ここでは「生産の社会的性格」が まったく消失し、「蓄積のための蓄積」、すなわち「取得」ばかりか「生産」までも「私的性格」一色に染まっているではないか。資本主義のシステムは、労働者階級が解体するものではなく、資本主義システムそれ自体が、その発展の結果として 解体するものであることを物語っている。

こうした歴史的文脈のなかで おこっている現象が「トランプ現象」に ほかならない。いうまでもなく「トランプ現象」は、たんにアメリカだけの現象ではなく、EU加盟各国や、フィリピン、韓国など アジア諸国をふくめて、現下の世界的現象となっている。

「トランプ現象」の物質的・経済的基盤の中枢をなしているものは、世界的な資本蓄積の限界である。それが、資本主義の経済と社会を支えてきた ごく普通の市民たちの不満と怒りを膨らませ、強烈な「リセット願望」となって現れているのである。

内なる不満は 外に 転嫁される。 身近なところでは、いま 日本の小中学校で蔓延している「いじめ」（生徒たちの欲求不満の 対外転嫁）から、大きくは、古今 東西 世界史上のあらゆる戦争（国内矛盾の対外転嫁）にいたるまで、およそ人間のおこなう喧嘩、紛争、抗争などは、すべて「内なる不満の対外転嫁」の原理の発現にすぎない。

なぜ戦争が起こるのか？ 国内矛盾の処理に行きづまって、問題を対外転嫁すること
によるのであって、決して権力者・支配者の強欲・領土欲などに由来するものではない！
(権力者にとって「欲」を張ることは危険なこと = 権力者は つねに狙われている、それ
も 案外 側近者から、である)



瀬戸岡「すべての戦争は 国内矛盾の対外転嫁 として引きおこされる」(論説)は
駒沢大学『経済学論集』第47巻 第2号(2016年1月)に 所収されている ほか、

駒沢大学における瀬戸岡の 最終講義(全4本のうちの ひとつ) 参照。この最終講義は、いまでも、
そのすべてを 視聴することが可能。 方法は簡単 —— インターネットに「瀬戸岡」、「最終講義」
の 2語 を入力して検索するだけ。

1. すべての戦争は 国内矛盾の対外転嫁として 引きおこされる

—— 平和をまもるためには国内の小さい問題を放置しないことが大切

2. 日本が「和の国」になったのは 島国で 気候が温和だから ではない

—— 日本古代史には学校で教えられていない苦難克服の長い過程があった

3. 優れた芸術は 雑念のない 自由な個々人によって 生みだされる

—— 人類の創造した 最高の芸術をとおして 現代を再考する

演奏： サラサーテ： ロマンズ / ベートーヴェン： ヴァイオリンソナタ「春」

(ピアノ 井手麻理子 / ヴァイオリン 井上春菜 —— 瀬戸岡ゼミ卒業生)

瀬戸岡 (作詞・作曲)「白駒の思い出」 (合唱 駒沢大学合唱団) ほか

全部 視聴すると 3時間45分ほどを(休憩込み)要するが、各部分は40分程度なので、
何回かに分けて ご覧／お聴きいただきたい。とくに 最後の演奏は 美しくも 熱演ゆえ、
最後までご覧 / お聴きくださることを お勧めしたい。



さらに いえることは、今日の世界情勢からは、資本主義の世界システムが ファシズム（一般市民が苛立ち、理性を失い、破壊的言動に巻きこまれ暴走していく政治現象）への道を拓いていることが読みとれる。

ファシズムにかんしては（ファシズムの意味、ファシズムの形成過程、その防止策など）については、パクストン『ファシズムの解剖学』（瀬戸岡訳、桜井書店、2008年）参照。

ロバートパクストン
瀬戸岡訳

ファシズムの 解剖学

桜井書店

ファシズムが 国内矛盾の鬱積の臨界点で発生する 社会現象であり、戦争が 国内矛盾の 対外転嫁として勃発するものである以上、世界史上空前の 資本蓄積と 不満の鬱積の 最終的解決は 戦争にゆきつくこと以外には ない。それが、現下の資本主義が やがて招来させかねない 全般的な「危機」の内容である。

それをかりに「**全般的危機**」と呼ぶとするならば、いまこそ まさに文字どおりの「**全般的危機**」の局面（phase）がせまっている といえないか。

少なからぬ「危機論」には 過剰とも考えられる言説がある。資本主義の蓄積活動がその活動の成立しうる基盤の 許容範囲を こえていることにたいする 正確な分析を 欠いたまま、結論を急いでいるからではないかと考えられる。

なかでも極論というべき（つい笑ってしまいそうな）大袈裟な政治表現に「資本主義の全般的危機」論（“общий кризис капитализма”；“allgemeine Krise des Kapitalismus”；“general crisis of capitalism”）があった。とりわけソ連による世界初の人工衛星打ち上げ成功（1957年）を機に、「資本主義の全般的危機は第三段階に入った」とする言説が流布されたが、科学的根拠をまったく欠いた議論であったというほかないだろう。

その資本主義の「全般的危機」について、いまこそ 真面目に議論すべき時代が到来したと いえないか？

■■■ ヨーロッパ近代の政治理念を 芸術をとおして考える 演奏会のご案内 ■■■

- 来年 1月9日（休日） 午後 2 時 開演（午後1時30分 開場）
- タワーホール船堀 大ホール（都営地下鉄 新宿線 船堀駅 目の前）

- ベートーヴェン 交響曲 第5番「運命」 + 交響曲 第6番「田園」

- 管弦楽 = レーベンバッハ管弦楽団 指揮 = 根本昌明
- 解説 = 瀬戸岡

- 全席指定 S席 5500円 A席 4500円（それぞれ割引ペアチケットあり） 高校生以下 2000円

- チケットのお申込み → レーベンバッハ音楽企画
電話 / ファックス：（046）257-3347 電子メール：lebenbach37@jcom.home.ne.jp

演奏に先立ち、私が 解説をすることになっています。

この ふたつの交響曲は、対照的な 曲想をもっていること、しかも 並行して作曲されたことから、ふたつあわせて「ワンセット」の交響曲と考えられます。そこには、近代思想の最も重要なエッセンス（哲学）が内蔵されている といえそうです。そのエッセンスとは何か？ ベートーヴェンは、そのエッセンスを どのように 音楽をとおして 訴えようとしたのか？ そのお話を したうえで、生の演奏を 聴いていただきます。